

オンラインディスコースの（再）生産過程と「人道主義」の中のヘイト

ーアニマルライツ団体の事例からー

木場安莉沙(名古屋文理大学) 張応謙(大阪大学大学院生)

1. はじめに

近年、オンライン上でのヘイトスピーチに関して様々な学術的分野で議論が交わされている。特に2020年の新型コロナウイルス感染症アウトブレイク以降は、オンライン上のあらゆる場においてアジア人（特に中国系の人々）に対するバッシングが横行し、これに伴い様々なディスコースの形成が見受けられる。Barreneche (2020) や Gover et al. (2020) は、こうしたバッシングの背景にはアジア人を「他者」として構築し周縁的に位置づける歴史的なディスコースの存在があると指摘している。本研究では、これらの先行研究では分析対象とされていないアニマルライツ団体に焦点を当て、アニマルライツという人道主義的ディスコースの中でアジア人バッシングが行われる過程や、アジア人がディスコース上で構築される過程を明らかにする。具体的には、イギリスに拠点を置くアニマルライツ団体 Protect All Wildlife の Facebook アカウントを取り上げ、新型コロナウイルス感染症のアウトブレイク直後でありアジア系へのヘイトスピーチが増加したと思われる2020年3月～5月の投稿を対象を絞る。分析は2名の研究者が批判的談話分析の手法を用いて行い、投稿内容と各投稿への直近30件前後のコメントから特定の国・地域や人物が批判されているものを抽出する。

Facebook におけるオンラインディスコースについては先行研究に蓄積がある。例えば Orru (2014) は、人種差別的な投稿の書き手が巧みに deracialization (人種に関連する（少なくともその可能性がある）議論の俎上から、人種に関する視座を消し去ること）を行うことや、それによって公共の場における人種差別的主張のノーマライゼーション（常態化）が助長されることを指摘している。Chaudhry (2020) は、人種差別など大多数の人々から反発を受ける可能性がある主張の持ち主は社会的孤立への恐れから沈黙を選ぶようになるという“spiral of silence theory”に疑義を唱え、Facebook などの匿名性が低いプラットフォームであっても人種差別的ディスコースが躊躇いなく共有されていることを研究から明らかにしている。Facebook 上の反移民グループにおいて移民や難民がどのようにディスコース的に構築されているかを分析した Ekman (2019) は、Facebook の公開ポストやそれに付随するユーザー同士の（コメント欄を通じた）インタラクションが、移民関連のトピックにおいて公に受容される言語使用の境界線をむしろ押し広げると述べている。本研究では Ekman に倣い、Facebook の投稿だけでなくコメント欄を、オンラインディスコース形成の場として分析対象とする。

2. データ例

Van Dijk (1993) によると、批判的談話分析はエリート層の覇権や社会的不平等が維持される談話的ストラテジーに焦点を当て、ディスコース（談話、言説）がいかんにしてパワーと支配（dominance）の再生産に貢献しているか・支配のイナクメントがどのように行われるかを明らかにするアプローチである。また、スピーチの場面や参加者といった様々なコンテキストからスピーチ内のスタイル、修辞、“local”な意味といったスピーチ自体のテキストに至るまでを分析対象とする。本稿ではこの視座に立ち、「アニマルライツ」に関連したディスコースが人種的不平等を維持する過程を明らかにする。先述の通り本研究はイギリスに拠点を置くアニマルライツ団体の Facebook アカウントを対象とするが、当該アカウントによる投稿の全体的な傾向としては、動物虐待や野生動物の殺害・売買等を行う個人・団体（国や地域を含む）を批判するものが多く、コメント欄にも批判対象への攻撃的な文言が多く見られる。こうした攻撃が批判対象のどのような社会的属性に向けられているかを nationality/ethnicity/culture, gender (masculinity/femininity), social class, humanity に分類し、社会的属性とは関連しないと思われる非難や罵倒（“Lock him up!” “Morons!” 等）はこれらと区別した。なお、humanity への攻撃とは、人類や世界全体を非難するような文言を指す。この結果、批判対象がアジア諸国の地域・人物である場合に以下のような傾向が見られることが分かった。

表1. アジア圏/非アジア圏に関するコメント数と批判された属性

	収集した コメント数	nationality/ethnicity /culture	gender	social class	humanity	その他
アジア	1,451	329	3	3	78	401
非アジア (主に西洋)	1,568	44	15	6	100	793

表から明らかなように、対象がアジア諸国であるか非アジア諸国（西洋圏およびその他地域）によって、攻撃される属性には大きな差が見られた。これについて具体例を見てゆく。

2.1 批判対象がアジアである場合のコメント

投稿ではアジア（特に中国）での事例を取り上げたものも多く、これについてはnationality/ethnicity/cultureへの言及がその他地域に関する投稿と比べて多くなる傾向があった。例えば「中国の食文化がパンデミックを引き起こした」という内容の投稿では収集したコメント27件の内1/3にあたる9件がnationality等に関する内容である。なお日付はコメントの送り先の投稿がなされた日付を指す。

<例1>What a dirty race of people. This is a disgusting practice and should be stopped immediately. This is what started the killer virus and I hope the ones who caused it are paying the price. (2020年3月21日)

また、アジア圏を“Asia” “the East”等で一括りにしたり、他のアジア諸国と並列するコメントも散見された。以下の例2はノルウェーの捕鯨を批判する投稿、例3は中国にてセンザンコウの密猟者が罪に問われたものの軽度の処罰であったという内容の投稿へのコメントである。

<例2>WTF? - who eats whale? I can guess..... the east is proving to be the scourge of the earth, not only by killing, eating and torturing all wildlife out of existence but by spreading pandemics to the rest of humanity. (2020年4月1日)

<例3>No surprise the monsters and to think the British and allies bailed the out the 2nd world war, we should of nuked the bastard's like Japan anoughter murdering killing nation (原文ママ) (2020年5月6日)

このように、bombやnukeといった言葉の使用は批判対象がアジアの場合に限って見られたが、非アジア圏に対するコメントにおいてはそのような表現は見られなかった。また、批判対象が西洋圏である場合にWestやEuropeといった言葉で地域を括るコメントは見られなかったが、アジア圏への批判の中で対象国をWestと対置するものは散見された。

<例4>Ban WHO. Withdraw Western companies from China. Ban travel from China. (2020年5月13日)

この他、パキスタン政府による野良犬の殺処分を批判する投稿では、宗教(Muslim)に言及するコメントが見られた。また、政府が動物保護に向けた政策を制定したことを伝える投稿の場合、中国政府に対しては“I don't believe it”等疑義を唱えるコメントが多いのに対して、その他の国・地域への批判にはこの傾向は見られなかった。

2.2 批判対象が非アジア圏（特に西洋圏）である場合のコメント

アジア圏への批判的コメントと比較して、非アジア圏への批判的コメントにはnationality等への言及が殆ど見られなかった。一方、批判対象の人物が西洋出身者であった場合に特徴的に見られたものとして、masculinityやsocial classへの言及が観察された。以下の例はオクラホマ州のトロフィー・ハンターを批判する投稿に寄せられたコメントである。

<例5>Small dick syndrome, how about his head on the wall! Those poor animals were more essential to the world than him... 🤔💩💔 (2020年5月11日)

また、批判の対象が西洋圏である場合、心理的要因や親の教育、また、全体数は少ないものの social class といったファクターが批判の矛先として挙げられていた。以下はイギリスで動物を虐待した男性に関する投稿（犯人である白人男性の写真付）へのコメントである。

<例6>That was mild punishment for what he did. He does need psychiatric eval and care. (2020年3月5日)

このように、アジア圏への批判には nationality や culture への言及が多く、西洋圏への批判にはそれらがほとんど見られない代わりに masculinity や mental condition への言及が見られるという傾向があったものの、以下に示すような例外も見受けられた。西洋圏を批判する投稿に nationality 等を攻撃するコメントが観察された例外的なケースとしては、攻撃対象はスペインに集中する傾向があった。下記の例はスペインの闘牛を批判する投稿へのコメントである。

<例7>Spain, among many other countries around the globe, is on it`s absolute arse at the moment.... Why not think about the 700 million Euro to save the people... not the "sport" of murder... (2020年3月30日)

更に、アジア圏の批判対象が nationality と masculinity の双方を攻撃されるケースも見られた。

<例8>Asian countries would eat 'shit on toast' if you told them they could grow a bigger 'one' 🤢🤢 ... (2020年5月1日)

上記のような例外も含め、こうしたコメント群がどのようなディスコースの(再)生産過程に関与しているのか、また、それらのディスコースがどのようなパワーの不均衡をイナクトするものであるのかを次章より見てゆく。

3. 考察

以上のデータから、動物の虐待等に関する投稿へのコメント群には、批判の対象である国や人物の社会的属性によって異なる傾向が見られることが明らかとなった。Van Dijk (1993) はアジア人に関する差別的記事を書いた Honeyford への批判をめぐるイギリスの保守派為政者のスピーチを分析した論文の中で、支配はポジティブな自己の表象とネガティブな他者の表象、もしくは中傷によって合図 (signal) されると述べている。また、支配的グループは自らのグループのネガティブな性質を隠蔽しつつ、他者のそれを強調ないし作り上げるのだと換言している。<例1><例2><例3><例7>で見たように、特定の国や地域、人種に言及し批判の矛先を向ける試みは、逆説的にはそれに該当しない国や人種を批判の対象から除外する試みでもある。<例2>や<例4>にははっきりと見られるように、“the East”を批判の矛先とする一方で“the West”はそれと対置され、アニマルライツの文脈において前者は antagonist、後者は protagonist として位置づけられるのである (Fairclough, 2003)。このストラテジーは“the West”を“We”として、“the East”を“They”として位置づける We/They dichotomy (Barreneche, 2020) とも言い換えることができる。Gover et al. (2020) は新型コロナウイルス感染症の流行に伴うアジア人ヘイトの背景にある要因としてこの二項対立の存在を指摘しており、アジア系アメリカ人が歴史的に「他者」として構築されてきたことと関連づけて考察している。Van Dijk (1993) の分析においても、Honeyford を擁護する保守派為政者のスピーチの中で「US と THEM の対照化」がレトリカルなストラテジーとして用いられていることが指摘されている。Barreneche (2020) は、“We/They”のいずれのアクターも、現実を均質的・画一的な想像上のグループとして恣意的に仕分けした記号的メカニズムから生じているとしている。実際には、<例7>から分かるように“we/the West”内部でも異なる位置づけが発現するなど、この二項対立に当てはまらない事例は存在するものの、アジア圏への批判には想像上の画一的なグループとしての「アジア」ないし“the East”が度々登場し、西洋圏と相容れない“They”として構築されるのである。Van Dijk の言葉を借りるならば、それら地域の文化や「民族性」はネガティブな性質として構築される。一方、西洋圏が対象である場合、批判の矛先は nationality や culture ではなく masculinity や (親の教育などの) より個人的な要因に向けられる。言い換えると、これによって西洋圏の nationality や culture はネガティブな性質として構築されることなく、その価値を減じられないまま保持されるのである。本研究で収集したデータにはしばしばアジア圏の文化を批判の対象としたものが見られたが、Holliday (2017) の言うように culture が race の婉曲として用いられているとすれば、文化に対する攻撃もまた、nationality/ethnicity への攻撃と切り離すことでは

きない。本研究に置いて culture を nationality や ethnicity と同じカテゴリーとして扱ったのはこのためである。

また、コメントの送付先である投稿内容自体にも着目する必要がある。Van Dijk (1993) がトピックの決定には政治的・社会的含意があると述べているように、それぞれの投稿においてトピックがどのように表象されているかはディスコースの生産を考える上で重要なファクターである。今回収集したデータにも、投稿自体に特定の国名・地域名への批判が含まれていた場合コメント群もそれらの属性を攻撃する傾向があった。また、〈例 6〉のようなケースでは投稿内容に「犯人には心理学的サポートが必要である」という主旨が書かれていたため、コメント群もこれに応じて犯人の心理状態に関連したものが多かった。つまり、団体により決定されたトピック表象が既に支配のイナクトメントであり、コメント群の傾向及びディスコース生産の方向性を左右していたと言うことができる。Duxbury et al. (2018) は 219 件の銃撃事件に関する 433 本の記事から、犯人が白人であった場合メディアの多くが犯人を「人生に困難を抱えて苦しむ気の毒な人物」として描くのに対し、犯人が黒人であった場合には「危険で、社会にとって脅威となる人物」として描くという傾向を明らかにしている。また、犯人が精神疾患を抱えると報道されている場合、犯人が黒人の場合は 17%、白人の場合は 78% が「社会の犠牲者」として描写されるとも述べている。本研究のデータにおいても、アジア圏に関するトピックでは国名・地域名を強調するのに対し、西洋圏に関するトピックでは犯人の心理状態等を強調するという投稿内容の表象形式が人種ヒエラルキーを維持するディスコースの再生産であるとともに、コメント欄にて同様の議論を喚起し、ディスコースの(再)生産を繰り返していたと言える。

4. 結論

本研究は報道機関や為政者などの大きな社会的発言力を持つアクターではなく、ソーシャルメディアに書き込まれた一般の人々のコメントから人種的ディスコースの生産やそれに伴う支配のイナクトメントを明らかにするものである。一方、本稿では取り上げなかった(社会的属性には関与しないと思われる)罵倒表現への詳察の不足など、再考の余地も多い。今後もデータ収集範囲を広げつつ、多角的に考察を深めてゆく必要がある。

参考文献

- Barreneche, S. M. (2020). "SOMEBODY TO BLAME: ON THE CONSTRUCTION OF THE OTHER IN THE CONTEXT OF THE COVID-19 OUTBREAK". *Society Register*, 4(2), 19-32.
- Chaudhry, I., & Gruzd, A. (2020). "Expressing and Challenging Racist Discourse on Facebook: How Social Media Weaken the "Spiral of Silence" Theory". *Policy & Internet*, 12(1), 88-108.
- Duxbury, S., Frizzell, L. C., Lindsay, S. L. (2018). "Mental Illness, the Media, and the Moral Politics of Mass Violence: The Role of Race in Mass Shootings Coverage". *Journal of Research in Crime and Delinquency*, 55(6), 766- 797.
- Ekman, M. (2019). "Anti-immigration and racist discourse in social media". *European Journal of Communication*, 34(6), 606-618.
- Fairclough, Norman (2003). *Analyzing Discourse: Textual analysis for social research* by Norman Fairclough, Routledge. (日本メディア英語学会メディア英語談話分析研究分科会訳 (2012). ディスコースを分析する 社会研究のためのテキスト分析, くろしお出版) .
- Gover, A. R., Harper, S. B., & Langton, L. (2020). "Anti-Asian Hate Crime During the COVID-19 Pandemic: Exploring the Reproduction of Inequality". *American Journal of Criminal Justice*.
- Holliday, A. (2017). "Native-Speakerism". John I. Lontas (ed.) *The TESOL Encyclopedia of English Language Teaching*. John Wiley & Sons, Inc.
- Orru, P. (2014). "Racist discourse on social networks: a discourse analysis of Facebook posts on Italy". *Linguistics and Philology*, 5(1), 113-133.
- Van Dijk, T. A. (1993). "Principles of Critical Discourse Analysis". *Discourse and Society*, 4, 249-283.